

子どもと育つ



第2次世界大戦末期、戦闘機の燃料用に松ヤニを採取した跡が今も残るアカマツの樹皮＝東京都武蔵野市の井の頭自然文化園で

身近な戦跡で 戦争を体感

15日は65回目の終戦記念日。戦争体験者が減る中、もの言わぬ語り部として戦争遺跡の重みが増している。沖縄や広島まで行かなくても、探せば意外と身近にある戦争の傷跡。自由研究の題材に親子で訪ねてみるのもいい。
(井上圭子)

東京都武蔵野市にある井の頭自然文化園。入り口正面の放飼場内外にそびえる約二十本のアカマツの根元をよく見ると、V字にはぎ取られた樹皮の下に約一メートル間隔で無数の傷がついている。

港区立高松中学校教員で歴史教育者協議会常任委員の東海林次男さんによると、第二次世界大戦末期、戦闘機の燃料不足を補うために行われた松ヤニ採取の跡だという。「国を挙げた『松根油緊急増産運動』にお年寄りや子どもまで駆り出されたが、燃料効率が悪すぎて実用化されな

かった。戦争の暗い一面を今に伝えるこのアカマツも立派な戦跡」と東海林さんは言う。傷跡を覆うように盛り上がる樹皮が六十五年の歳月を物語る。

各地の戦跡の撮影を続ける戦跡写真家の安島太佳由さんは「実際に行って自分の目で確かめることで、かつて日本でも戦争があったことを実感できる。その戦跡が当時担っていた役割を知ると、日本の戦争全体にも目が向くようになる」と身近な戦跡を訪ねる意義を語る。

身近な戦跡はどうやって探せばよいか。安島さん自身は「地元図書館の地域資料コーナーで関連書を探す、『戦跡』『戦争遺跡』をキーワードにネット検索する、地域の教育委員会に聞く」という。

東海林さんは新聞や専門家の活用を勧める。「東京なら、大空襲の三月十日、五月二十四、二十五日や終戦記念日前後の過去記事。地域の戦争展や平和の集いの実行委員会、戦跡保存会、東京大空襲



米軍機の弾痕が残る旧日立航空機立川工場変電所跡＝東京都東大和市で(安島太佳由さん提供)

古い建物や樹木 下調べし、より深く理解

・戦災資料センターなどで聞くのもいい」
「よみがえった黒こげのイチヨウ」(大日本図書刊)の著者で被災樹木に詳しい元都立高校教員の唐沢孝一さんは「昔からある神社や寺院でご神木といわれる大きな樹木を観察してみる。樹皮が黒焦げになっていれば被災した可能性があるので社務所などで確認してみてもいい」と助言する。

ただし、常時公開か▽許可は必要か▽安全に行ける場所か―などは下調べを。東大和市の旧日立航空機立川工場変電所跡のように公園内に保存され常時見学可能な遺跡もあるが、「見学期間や時間が決まっていたり、取り壊されたり、予約や許可がないと入れない場所もある」と安島さんは話す。

東海林さんは「戦争に至った背景や、戦跡が担っていた役割を事前に調べておく」と理解が深まる。昭和初期の地図があると当時の状況が把握しやすい」

現地に立ったら五感をフル稼働しよう。「ものは語らないので、自分の目で確かめ、さわれるものにはさわって、目を閉じて当時に思いをはせてみる。銅像のない台座、鐘の代わりに石がつるしてある寺などでは、なぜそうなったかを考えてみて」と東海林さん。

唐沢さんは「いまの子どもたちの親世代も戦争を体験していない。親子で一緒に訪れ、どう感じ何を考えたか、話し合えたら素晴らしいです」と期待を込める。